

# 産業福利活動における訪問看護婦協会の働き

——「安全第一」運動への協力と移民のアメリカ化——

上野 継義 (京都産業大学)

## 目次

1. 安全は家庭から
2. 専門職の中の専門職
3. 労使関係の狭間で
4. 女性専門職としての看護
5. 移民のアメリカ化

## 1. 安全は家庭から

米国の安全運動 (safety movement) のおおきな特徴のひとつは、「安全第一」Safety First のかけ声が「工場内ばかりか、路上、学校のなか、さらには家庭内へも入り込む」<sup>1)</sup> ようになったことである。とくに移民労働者家庭の婦人と子どもたちが保安教育の対象として注目されるようになった。地域ぐるみ、家族ぐるみで「安全第一」を心掛ける習慣を身につけさせることが、ゆくゆくは職場における安全な作業慣行の確立に結びつくとの考えから、セイフティ・マン (safety men) ——企業の安全管理者たちはこのように呼ばれた——は、地元の小学校やカソリック教会、YMCA (Young Men's Christian Association) や訪問看護婦協会 (visiting nurse associations) など、普段から移民労働者とその家族に深くかかわりを持っていた企業外部の団体に支援と協力を求めるようになる。このような企業の求めに対してとりわけ好意的に反応したのが訪問看護婦協会であった。安全運動に協力することで労働者階級に接し、年来の課題である公衆衛生への取り組みをより実効性のあるものにするだけでなく、それを訪問看護婦の仕事領域の拡大と地位向上につなげ、看護の専門職化を推し進めようとの思いから、工場に産業看護婦 (industrial nurses) を派遣するという新しいサービスを組織するようになる。<sup>2)</sup> 米国における訪問看護運動の創始者リリアン・ウォルド (Lillian D. Wald) は、1911 年 11 月 11 日、ニューヨーク市政治学会の大会で講演し、「多くの産業企業 (正確な数値は得られません、この実験は始まってまだ日が浅く、活字情報は断片的で不正確ですから) が医師または看護婦、あるいはその両方を雇用している」と述べ、産業看護の発展に期待を寄せている。<sup>3)</sup> その後の数年間に北部工業州を中心に労働者災害補償法 (workmen's compensation laws) の制定が相次ぎ、産業看護婦の雇用拡大にとって好条件が整う。そして第一次大戦期には連邦政府の後押しもあって看護婦の雇用がすすみ、1919 年 7 月には 871 企業で 1,213 名の正看護婦が雇用されていた。<sup>4)</sup>

【研究の目的】本稿の目的は、「安全第一」を家庭の中から構築していくプロセスを訪問看護婦協会ならびに協会から派遣された産業看護婦の働きに即して復元し、安全運動をより深く理解することである。こうした作業を通じて

<sup>1)</sup> S. C. Dickinson, *How to Organize for Safety*, Arizona, Bureau of Mines, University of Arizona Bulletin, no. 81 (March 10, 1918): 27 (quotation), 2.

<sup>2)</sup> 労働者に対する安全教育は、工場内での取り組みだけではおのずと限界があるということにセイフティ・マンは気づき、「安全は家庭から開始されねばならない」との理解が生まれる。その経緯と移民のアメリカ化運動とのつながりについては、上野継義「革新主義期アメリカにおける安全運動と移民労働者——セイフティ・マンによる『安全の福音』伝道」『アメリカ研究』第31号(1997年3月): 19-40. この論説ではYMCAとのかかわりは論じなかったが、先行研究に、Gerd Korman, *Industrialization, Immigrants and Americanizers: The View from Milwaukee, 1866-1921* (Madison: State Historical Society of Wisconsin, 1967). また同時代史料は、たとえば、Harriet Ferrill, "In Back of the Bar' - the Oddest School Rooms in Chicago," *Chicago Daily Tribune*, June 19, 1910.

<sup>3)</sup> Lillian D. Wald, "The Doctor and the Nurse in Industrial Establishments," *Proceedings of the Academy of Political Science in the City of New York* 2, no. 2 (January 1912): 41.

<sup>4)</sup> Yssabella Waters, "Industrial Nursing," *Public Health Nurse* 11, no. 9 (September 1919): 729 and 731. 以下の二文献はいずれもウォーターズに依拠しているが、この統計数値が得られた年月を誤解している。Annie M. Brainard, *The Evolution of Public Health Nursing* (Philadelphia: W. B. Saunders Co. 1922), 353; Bethel J. McGrath, *Nursing in Commerce and Industry* (New York: Commonwealth Fund, 1946), 5;

最終的には、安全運動と訪問看護運動の両方をアメリカ人事管理成立史の枠組みの中に位置づけることによって、これらの運動が企業管理の発展にいかなる役割を果たしたのかを明らかにしてみたい。この二運動の協力関係は、まず局地的レベル（個別企業あるいは個々の事業所と各地の訪問看護婦協会との間）で進展するが、やがて全国組織レベルでの協調体制が実現する。<sup>5)</sup> セイフティ・マンの全国組織の母胎となる鉄鋼電気技術者協会の安全委員会が設置されたのは1908年、全国組織の設立に向けて初めて全国規模の安全大会が開催されたのが1912年、その翌年に「全国安全協議会」National Safety Council (NSC)が設立された。<sup>6)</sup> 他方、訪問看護運動のリーダーたちもほぼ同時期に全国組織の形成に向けて動きはじめていた。1906年から9年にかけてシカゴやクリーヴランドのいくつかの訪問看護婦協会が行動を開始し、やがて諸協会の合意を得て、1912年に「公衆衛生看護のための全国組織」National Organization for Public Health Nursing (NOPHN)が設立される。<sup>7)</sup> 安全運動は1910年代半ばに人事管理運動 (personnel management movement) に合流し、NSCは大企業の労務政策を方向づける一大勢力となったために、NSCと深いかかわりを持つNOPHNや産業医の全国組織もこの管理運動に巻き込まれていくこととなった。<sup>8)</sup> アメリカ労務管理史研究で従来取り上げられることの少なかったこの流れを全面的に考察することは紙幅の関係でかわないが、【リサーチ・クエッション】本稿ではまず、訪問看護婦協会がなぜ産業看護婦の派遣事業に手を伸ばしたのか、この問いに答えるために米国における訪問看護運動の歴史をさかのぼり、産業看護がいつ、どこで、どのように始まったのかを跡づける（第2節）。そのあとで、さらに次のような問いに答えてみたい。産業看護婦はどのような仕事に従事し、いかなる困難に直面し、どのように対処したのか？（第3節） 訪問看護運動のリーダーや産業看護婦たちは看護をどのような職業だと考えていたのか？（第4節） 彼女たちは移民労働者とその家族をどのように見ていたのか？（第5節） こうした一連の疑問に答えることによって、訪問看護婦協会ならびに産業看護婦の働きを浮き彫りにし、先述の研究目的に可能な限り接近してみたいと思う。

【検討史料とその性格】本論に入るに先立ち、史料の性格について一言しておきたい。本稿で主として検討した史料は、シカゴ訪問看護婦協会文書のほかは、20世紀初頭の既公文献である。19世紀まで看護は専門職であるとの社会的認知を得ておらず、この時代に公刊された看護テキストのほとんどは男性医師によって書かれていた。たとえ看護婦が書いたとしても、その価値が認められていなかったために、図書館員も看護婦も保存の努力を怠った。<sup>9)</sup> 後世に残された史料の付存状態それ自体が、臨床における性別役割構造や当時のジェンダー規範の影響下で取捨選択された結果である。残存している看護婦の書き物はぎわめてわずかであり、僥倖の産物といってもよい。こうした事情は

<sup>5)</sup> 1920年にはNOPHNに産業看護部会(industrial nursing section)が設けられた。同部会は1930年にNSCに移管されるが運営委員会の役員メンバーは替わらず、この体制が1943年までつづき、その後NSCが自前の産業看護部会を立ち上げてからも協力関係は存続した。Bethel J. McGrath, *Nursing in Commerce and Industry: For National Organization for Public Health Nursing* (New York: The Commonwealth Fund, 1946), 6-7.

<sup>6)</sup> 上野継義「アメリカ産業における安全運動の波及と労使関係管理の生成——1908～1915年——」『経営史学』第31巻第4号(1997年1月31日): 1-31.

<sup>7)</sup> Annie M. Brainard, *The Evolution of Public Health Nursing* (Philadelphia: W. B. Saunders Co., 1922), 324-25.

<sup>8)</sup> 多様な非営利団体が企業の福利活動にかかわっており、合衆国労働統計局はこのような現象を "cooperation with outside agencies" と言及している。U.S. Bureau of Labor Statistics, *Welfare Work for Employers in Industrial Establishments in the United States*, Bulletin, no. 250 (February 1919), 122-23. このような福利活動の性格を必ずしも意識しているわけではないが、次のような先行研究がある。YMCAと産業企業との協力関係については、Gerd Korman, *Industrialization, Immigrants and Americanizers: The View from Milwaukee, 1866-1921* (Madison: State Historical Society of Wisconsin, 1967); Thomas Winter, *Making Men, Making Class: The YMCA and Workingmen, 1877-1920 Chicago: University of Chicago Press, 2002* (Chicago: University of Chicago Press, 2002). アメリカ社会奉仕協会ならびに全国市民連盟と大企業雇主との関係については、Marguerite Green, *The National Civic Federation and the American Labor Movement, 1900-1925* (Washington, D.C.: Catholic University of America Press, 1956). 第一次大戦期と1920年代の都市黒人連盟については、James R. Grossman, *Land of Hope: Chicago, Black Southerners, and the Great Migration* (Chicago: University of Chicago, 1989); 樋口映美『アメリカ黒人と北部産業——戦間期における人種意識の形成——』（彩流社, 1997).

<sup>9)</sup> Carol M. Shisler, "Evaluating Your Nursing Collection: A Quick Way to Preserve Nursing History in a Working Collection," *Journal of Medical Library Association* 95, no. 3 (July 2007): 278-83.

世紀の転換とともに様変わりした。*American Journal of Nursing*や*Public Health Nurse*など、看護の専門職化を目指す専門雑誌が創刊され、NSC主催の安全大会など男性主体の集まりで看護婦が堂々と大会報告をおこなうようになる。これらの雑誌や安全大会議事録に掲載された論説は、看護職リーダーや産業看護婦たちの手になるものであり、情報源としてはなほ貴重だが、しかし同時に丁寧な史料批判が求められる。これらの史料から観察しうるのは、看護の専門職化に向けて組織的な努力を開始した看護婦たちの思想と行動であり、現状分析よりも将来展望や希望を語っていることが少なくないからである。

【分析視角】これらの史料をどのような視点から読み込んでいくか、その基本的な視座についてもあらかじめ述べておきたい。訪問看護運動のリーダーたちは自己の仕事領域を専門職として構築することに情熱を傾け、信念をもって行動しており、そのために1970年代後半から80年代にかけて現れたいわゆる「新」看護史("new" history of nursing)の諸研究が批判的に問うた看護は専門職たり得るのかという問題意識は考慮の外にあった。<sup>10)</sup>この学派に属する看護史家バーバラ・ミロッシは、デヴィッド・モンゴメリーやハーバート・ガットマンら新労働史家の研究を引き合いに出して、工業化過程ならびに職場の合理化過程の影響下にある伝統的なクラフトの中に看護の仕事位置づけ、自分の仕事への統制力を欠いている点を指摘した。看護労働の文化は、病院附属看護専門学校の伝統的な徒弟制度に根をもっているために、職人技と実務経験と自制心に価値をおいてきた。これこそが看護の大きな流れであって、専門職イデオロギーは影響力はあるがはなほ少数の逸脱現象に過ぎなかった。看護は「専門職ではないし、専門職たりえない」と。<sup>11)</sup>本稿では、こうした研究の存在を承知しつつも、まずは訪問看護運動のリーダーや産業看護婦たちの言説に寄り添い、彼女たちの求めていた「女性専門職」としての看護がどのような性格を有していたのかを明らかにしたいと思う。とくに産業看護婦の場合、訪問看護婦協会という女性団体の采配の下で働いており、また男性医師のコントロールの及ばない産業福利分野の仕事も多く引き受けていた。<sup>12)</sup>こうした点は特別の考慮を要するであろう。なお、本論文においてnurseを「看護師」ではなく、「看護婦」と訳している。それは訪問看護婦協会が管理職も含めてすべて女性だけで組織された団体だということのほか、なによりも訪問看護運動のリーダーたちが看護を女性にのみ開かれた職業だと考えていたことから、彼女たちの意向を訳語に反映させた方が、より正確な史料理解に結びつくと思われるためである。

## 〔このハンドアウトはウェブ掲載用です。第2節以下は省きました。〕

<sup>10)</sup> 1970年代末葉から80年代に進展した「新」看護史の研究は、看護の専門職性に疑問を呈し、男性医師と看護婦との性別役割分業の存在を批判的に指摘するものであった。Jo Ann Ashley, *Hospitals, Paternalism and the Role of the Nurse* (New York: Teachers College Press, 1977); Janet Wilson James, "Isabel Hampton and the Professionalization of Nursing in the 1890s," in *The Therapeutic Revolution*, eds. Morris J. Vogel and Charles E. Rosenberg (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1979); Jane E. Mottus, *New York Nightingale: The Emergence of the Nursing Profession at Bellevue and New York Hospitals, 1850-1920* (Ann Arbor, Mich.: UMI Research Press, 1981); Ellen S. More, "Nursing History," *American Journal of Education* 92, no. 4 (August 1984): 525-29.

<sup>11)</sup> Barbara Melosh, *"The Physician's Hand": Work Culture and Conflict in American Nursing* (Philadelphia: Temple University Press, 1982), 15-35, 20 (citation). なお、歴史家ムーアはミロッシの議論に重要な留保をつけている。すなわち、専門職の研究史が明らかにしているように、どのような専門職分野であろうと、専門家は自分で言うほどの自律性は持っていないものであり、看護の仕事専門職から排除するのは時期尚早ではあるまいかと。私はこの見解に同意する。Ellen S. More, "Review Essay, Nursing History," *American Journal of Education* 92 (August 1984): 525-29. 労働史家プロディの書評も併せて参照のこと。David Brody, "The Job of Nursing: Work and Work Culture in a Women's Trade," *Reviews in American History* 12 (March 1984): 115-18.

<sup>12)</sup> 訪問看護職の部分的な自律性は、ミロッシが公衆衛生領域の仕事に確認しており、またNakamuraがリリアン・ウォルド文書から具体例をすくい上げている。Melosh, *Physician's Hand*, 9; Keiko Nakamura, "Lillian D. Wald and Visiting Nursing," 『アメリカ研究』17 (1983): 110-12.